

第六章 山口文化

一 山口の繁栄

室町時代の中期以降、幕府の権力は次第に衰え、特に応仁の大乱以後は、京都は戦禍のために焼けただれて「なれや知る都は野辺の夕ひばり上がるを見ても落つる涙は」と世の人をして詠歎せしめた。このときにあたって、地方豪族の中にはその強盛をうたわれ、富裕をはこつて、將軍をもしのぐ勢力を有するものが現われ、その城下町においては商工業の著しい繁栄を来たし、絢爛たる文化を打ちたてた。なかんずく、東には北条氏の小田原があり、西には大

内氏の山口があつて、中世都市の双璧をなした。

そもそも山口の地は、吉敷郡宇努郷の古郷域に属する。今の上宇野令・下宇野令はその遺名である。山口という地名は、もと萩の円政寺に伝えられていた建長六年（一二五四）在銘の金鼓に、「防州山口月輪山円政寺天神宮」とあるのが、ものに見えたはじめてである。この円政寺は山口にあったのを江戸時代に萩に移したもので、今も円政寺の町名は山口に残っている。山口とは恐らくこの地が阿武郡の山々に分け入る口という意味からおこった地名であろうと考えられるが、近藤清石は古く東方便山（鳳凰）で鉱石の採掘が行なわれていて、山陰街道から分れて、この鉱山への入口に当たるところから生じたものであらうといっている。



円政寺金鼓〔重文〕（大阪府細見氏蔵）